

授業レポート「『主体的・対話的で深い学び』の授業実践を振り返って」

○観点別評価や指導案形式について

・評価の観点、4 観点（美術への関心意欲態度・発想や構想の能力・創造的な技能・鑑賞の能力）から新学習指導要領の3 観点（知識及び技能・思考力判断力表現力・学びに向かう力人間性）に変更となり読み替えが難しいと感じた。特に意欲的に発想（思考判断）している場面をどのように観点別に分けていけばいいのか思案した。今までの積み重ねから4 観点で整理されていたものが幅を持った3 観点へ変更になり混乱することがあった。新指導要領に示されているが具体的な事例や新しい経験や来年度の評価基準など提示によって、評価観点をさらに整理していく必要があると感じている。

・指導案形式について、パイロット教員研修や初任者研修で推奨されている指導案形式は、単元目標を学習指導要領の内容からコピーペーストで良いこと、単元計画を評価基準で示していくことなどある。利点は内容記入が整理された形式であり指導案制作の時間的負担が少なくすむことである。授業時間（研究授業時間）の表記は任意形式であるので教科の特性に応じて作成できたので取り組みやすかった。課題は、新形式がまだ共通理解できていなく説明が必要であった。評価観点の変更した部分は上記の通りである。

○公開授業の研究協議において、意見やその後考えたこと

・指導案を基にした協議を高校美術部会で2 回実施していただいたため、内容が理解しやすく正誤がとれていると評価された。

・授業は鑑賞と発表の時間が主であった。課題のひとつとして、「かっこよかった・見やすかった」などの言葉が多く内容を具体的に示す語彙が少ないと感じた。また、発表する内容（視点）を明確に伝えることやその練習が必要であった。国語と連動も授業効果が高まると感じている。

○「主体的・対話的で深い学び」の実践授業を行う上での留意点

・主体的対話的になるように、2 人・グループ内・クラスでの意見交換（発表）相互評価を段階的に実施した。各自が集中することができた。クラス全員が発表鑑賞すると時間がかかる上に間延びしてしまい集中力不足になったり、や聞く時間が多くなることで主体的でなくなったりすると思われる。主体的対話的を目指すためには間延びを注意し、活動内容や発表システムを工夫する必要がある。

○「教科の特質に応じた見方・考え方」を働かせた授業実践について考えたこと

・見方考え方を働かせるため、ルーブリック評価を取り入れた。また、学習到達状況を記録評価するためでもある。他者評価と自己評価を点数と記述式で比較することで客観的に捉えやすくした。自己の見方が他者の見方とすり合わせることができたことで見方考え方が広がったり、自己肯定感が高まったりしたと生徒から感想があった。ルーブリック評価の美術教科への有効性が感じられた。

・授業の学習目標や生徒の行動目標の一致とルーブリック評価の相互一致が必要である。一貫性がないと評価に混乱が発生するためである。また、一覧表は生徒にとってわかりやすく評価項目をより具体的に基準を定める必要がある。

・上記の評価を活用していくことで、評価と指導の一体化にもつながっていくと考える。